



日用百科の使われかた —小口の手沢相は語る—

人文科学研究所教授 横山俊夫

「昔の日用百科」と呼べる書物は貴重な歴史資料である。多くの人びとがそれを使って暮らしたと思われるからである。しかし、その使われかたの実際については、日本でも外国でも研究が進んでいない。

いつどのような内容のものが刊行されたかはわかって、それが誰に購われ、どこが読まれたかということになると、歴史家の口は重い。もちろん故人の日記から断片的にわかることはある。しかしそれらの書物のはたらきの全貌は茫漠としている。研究の遅れの理由は、端的には、これまでの出版史研究が書物を作る側に重点をおいてきたことにある。

じつは、日本の工業化以前の社会、とりわけ17世紀末から19世紀半ばにかけての比較的安定した時代の生活文化の大枠を考える場合には、看過ごせない二種の日用百科書がある。それは「節用集」と「大雑書」である。前者は和語をいろは順と門部別にならべた漢字変換辞書として15世紀半ばに登場。17世紀後半に町や在の役持ち層が公用文を多く綴るようになると需要が増し、それに応じて、地図や王代一覧、礼法や芸道の指南、料理献立や薬方の記事ものるにいたる。大雑書はおもに日柄や方選びの書。「雑書」と称された12世紀末の暦占書や、14世紀はじめに形をなした『篋篋内伝』や『拾芥抄』などの記述をとりこんで、17世紀初期に『大ざつしよ』として成立。やがて、明末流行の命占書「三世

相」や養生知識もとりこむようになる。

この二種の書物は、あわせて使われた場合も多く、18世紀を通じて、大雑書のなかの人気項目、たとえば



五行説にもとづく男女相性占いや星の運行に応じた吉日選びなどは、少しづつ節用集の付録に加えられてゆく。19世紀前半の最盛期の節用集といえば、総丁数四百以上、その巻末には大雑書も縮約掲載され、いわば、俗世の外との通交も手引していた。もちろん節用集の中核は和漢辞書。紙幅の約四分の三を占めて、書札にかなう、あるいは「雅」なる漢字作文を助け、巻頭部分には世上百般の知識や礼法をかけた。

このような厚冊本節用集は、いわば書き言葉の礼を中心に、天地人のかかわりのなかでの人の作法、civility を説いた総合礼法書であった。これらがどのように使われたのかという問題は、したがって、かつての日本にみられたある種の文明を考える鍵ではないだろうか。1850年代に訪日した英国使節らは、当時のどの国も礼法が社会の一部に極在するが日本は異なるとして、その「civilisation」の質を高評したが、そのような議論とも呼応する何かが見えてくるかもしれ

ない。

厚冊本節用集のなかでも、とくに広範囲に用いられたのは『永代節用無尽蔵』であった。天保二年(1831)から文久四年(1864)まで、概ね同じ構成で3版を重ねた。1980年以来、私が折にふれて各地で見る機会のあったこの残存本60数点のうち、その使われかたの思い出を語りうる高齢者に会えたのは残念ながらわずかの機会だけ

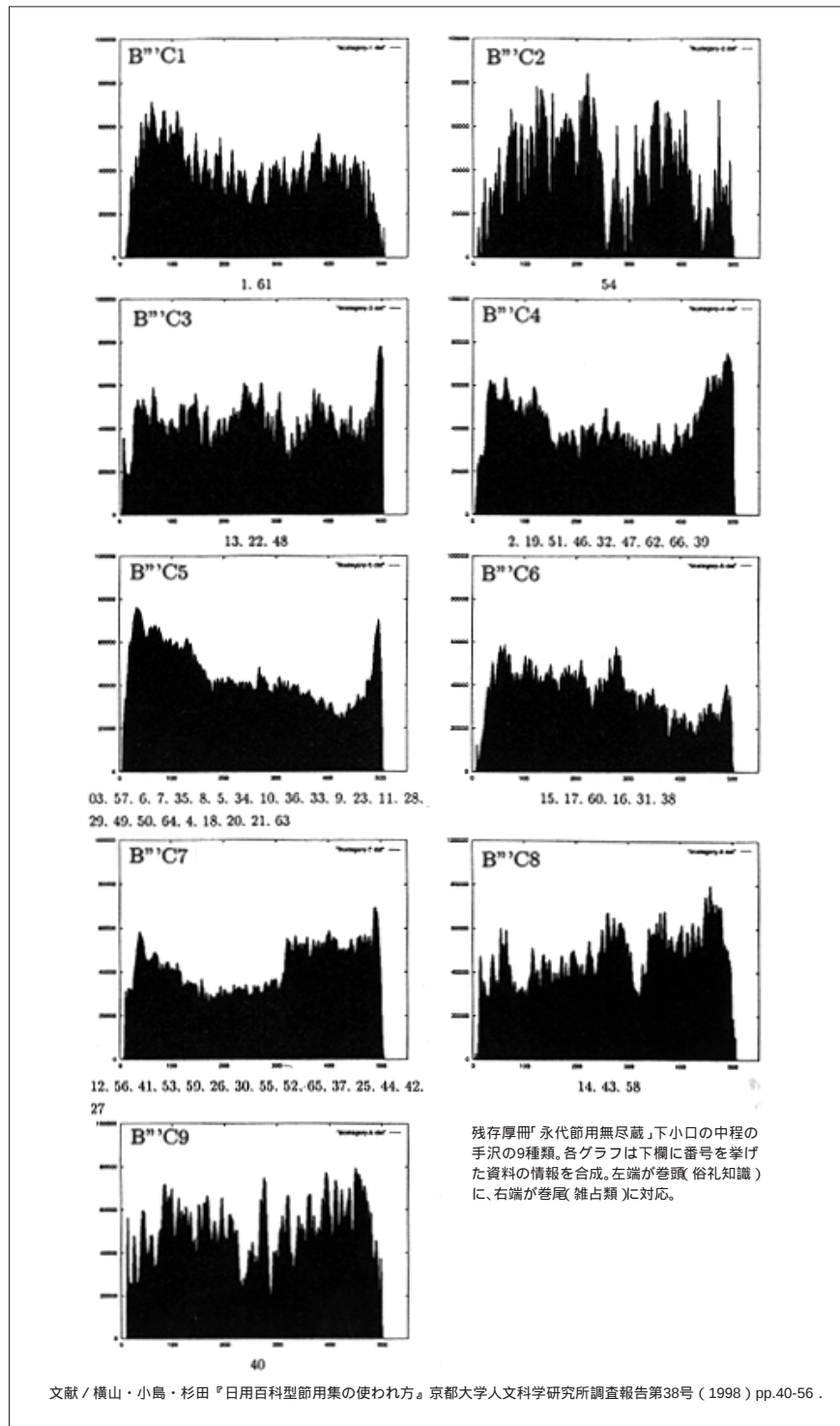
であった。「じいさんだけが見ていて他の者にはさわらせなんだ」「町内でこれを持っていたのはウチともう一軒だけやったナ」「祖父は村中の子供の名前をこれを使ってつけてました」などと。

しかし、語られる過去は限られている。それに古いものを大切にする家でしか聞けないという偏りもある。しだいに私は、話よりも書物そ

のものに再び向きあうようになった。「ウチの宗派は神さんが嫌いで、まじないやお札というものはご縁がのうて」と聞かされても、その家の節用集の「まじなひ調法記」の欄が摩耗していることもある。

こうなると、調査は『国書総目録』にあがっているような、旧蔵者の手をはなれた諸冊も調べたくなる。やがて、各冊の使われかたを簡明にとらえる方法を思いついた。下小口の中ほどから背にかけて出る手ずれの跡の縞模様である。そこは求める丁が繰り出されるときには使用者の手が触れず、開かれて読まれているときだけ触れ、そのつどかすかに紙の下端が摩耗する。しかも他の丁の同じ位置に手は触れない。二世以上にわたる使用で、この部分に茶褐色の筋紋が濃淡さまざまに出てくる。濃いところは、よく読まれた丁である。小口の「手沢相」は雄弁ではないか、と。

はじめは、それをスケッチし、特徴を書き留めるだけであった



が、多くの事例を比較したり、共通の傾向を見ようとすれば、一定条件下での精密な撮影と、それをスキャナーにかけて濃淡の分布を数理的にとらえなくてはということになり、国立民族学博物館の杉田繁治氏、電力中央研究所の小島三弘氏ほかの方がたの協力を得ること10年。件の小口部分の映像を0から255までの濃度をもつ微小点群に転換し、それらを丁の配列に対応させた数百の線上に数量として集積して棒グラフに表示し、資料ごとにできるそのグラフの上端の凹凸の形状の互いの「距離」を相関係数を求めて類別するという方法におちつき、ようやく昨年、『永代節用無尽蔵』64点の使われかたの類型分析を本学人文科学研究所の調査報告に公表した。

そこでは、情報圧縮上の無理が少ないという理由で浮上した9範疇分類に注目してみた。そのうちのひとつが数の上で他をしのいだ。手沢では、和歌や謡曲に執心で辞書を頻繁に使用し、

五行占いにもこだわり、古今の雅びをしたう気配も濃厚。それが京都上京下京、宇治、丹波善王寺、近江八幡、金沢、仙台、和歌山で使われていたものの中にあり、旧蔵者の家業も、宮廷や城勤め、奥医師、漢学者、呉服屋、畳表問屋、飛脚業などとさまざまであった。18世紀前半に西川如軒が、日本では庶民が高位の公家武家のまねをしたがると呆れていたが、その傾向、kugefication（筆者造語）を物語るようなデータが出たともいえる。

ただし、デジタル化による画像処理は、ナマ資料の抽象化の積み重ねにほかならない。とりあえずの分類範疇はモデルではありえても「実態」そのものではない。それでも、地域や職種や階層に「特有」な暮らしむきがあるはずだとこのこれまでの思い込みがほぐれ、自由な発想をうながされる楽しみがわいてくる。

（よこやま としお）

附属図書館100周年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛

松 田 博

『総目次』には「資料紹介」の目次欄がある。京都大学が所蔵する資料について、もちろんすべてではないが、紹介・解説のあったものを別立て目次にしたものである。京都大学所蔵の参考図書や特殊文庫にはどのようなものがあるかが通覧でき、内容が知りたいと思えば解説等本文に早速いきつくという、たいへん有効で便利な目次であるといえる。

この「資料紹介」の目次を読むと、2回以上解説が付された特殊文庫で、しかも比較的長文の解説のあるものを絞ってみると以外に少ないことに気が付く。それには相当の理由があったのであろうが、ひとまずここではこうした条件にかなうものとして「上野文庫」、「旭江文庫」、「舎密局・三高資料」の3つがあることを指摘しておく。

経済学部の所蔵にかかる「上野文庫」は、朝日新聞社元社主上野精一の旧蔵書で、ジャーナリズム史関係をはじめ政治史、社会史、思想史

関係資料など27,000冊におよぶコレクションである。1955年から40年間寄贈され続けたが、その寄贈期間の長さにおいても上野文庫に匹敵するものは全くない。上野文庫が京都大学に寄贈されるに至る経緯やその内容については、『上野文庫目録』中の「上野文庫由来記」や「上野文庫概観」に詳しい。また、『静脩』誌上での紹介・解説もダントツの4回以上を数え、解説内容も長文に類する。いずれの解説も文庫のなかの個別資料、あるいは特定主題にそった資料群に焦点を当てたものだが、文庫内容の質量共の豊かさと旧蔵者上野精一の見識の高さを語る内容となっている。それだけに今後も上野文庫についての紹介はあると思うが、ここでは文庫の1点であるアーネスト・サトウ旧蔵本についてふれておきたい。

「上野文庫1冊のインキュナビュラについて」（1）に次のような表現が見られる。“ところで、どのような経緯でこのインキュナビュラが